

放送大学通信

on air

オン・エア

no. 69

発行日 平成15年3月10日

発行 放送大学

〒261-8586 千葉県美浜区若葉2丁目11番地 043-276-5111(代)

CONTENTS

私達の都市をどのようにつくればいいのか	1
教授 香山壽夫	
AAOU第16回大会参加報告	4
助教授 濱田嘉昭 / 助教授 大橋理枝	
研究室だより	6
「みえないものをみる」 不可視な心の実体とは	
教授 西川泰夫	
94歳の卒業生が丹保学長と対談	7
同窓会へのお誘い	7
放送大学同窓会連合会会長 須藤國夫	
放送大学学園の改革について	8
平成15年度教養学部開設科目紹介	
リハビリテーション('03)	
北海道大学教授 眞野行生 / 教授 近藤喜代太郎	10
ユング心理学('03)	10
教授 大場 登	
マスメディア論('03)	
教授 柏倉康夫 / 興立長崎シールト大学教授 秋野弘巳	11
東京国際大学助教授 小室広佐子	
芸術・文化・社会('03)	11
教授 徳丸吉彦 / 助教授 青山昌文	
理想的な高・大連携	12
広島県立萩園高等学校との連携協力	
広島学習センター所長 小笠原道雄	
退任のあいさつ	13
愛知学習センター所長 田中健治 / 福岡学習センター所長 五斗一郎	
学習センターの整備	14
神戸大学の新築校舎への移転	
平成15年度第1学期教務スケジュール	15
教務のお知らせ	16

私達の都市をどのように つくればいいのか

産業と技術 教授 香山 壽夫

……創造の才に恵まれたすべての詩人、芸術家達は、知恵や、魂の様々な徳性の父ではなかったか。そして ディオティメスはさらにつけ加えて言った その知恵にも多くの形があるが、最も美しい、気高い知恵は、都市と住居を組織する仕事に関わるものである。

プラトン「饗宴」

1) 便利・安全だけを追い求めてきた日本の都市

それを、美しい、住む喜びのあるものにつくりかえるにはどうしたらいいか、それが私のテーマです。美しい町を築くこと、これは人間にとって、いつでも、どこでも、大切な仕事でした。すでに2,400年も昔、古代ギリシアの哲学者プラトンは、先のように述べましたが、そのプラトンが、今日の日本の都市を見たならば、日本人からは知恵や徳性は、失われてしまったと断ずるのではないのでしょうか。「私たちの住んでいる日本の諸都市は、醜く、混乱し、落ち着きがない。」私は今やそのように率直に認めなければならないと思います。日本の町は確かに便利で安全という点では世界で第一級のものと言えるでしょう。個々の建築物を取り上げると、その技術に

おいても造形性においても、国際的に注目されるものが数多くあります。しかしそれが集まってできる私達の都市は、何故こんなに住む喜びのない雑然としたものになっているのでしょうか。

これは、決して私ひとりの片寄った見方ではないと思います。十数年前まではそれでも、何となく日本の町がちぐはぐな感じがしても、これが日本の良さで、見えない秩序がその底にある、といった論を立てているものが多くありました。とりわけ、日本びいきの外国人の日本研究者にはそういう姿勢が一般的でした。しかし、今は、率直に、日本の都市と自然はおかしくなった、と直言する人が増えてきました。たとえ

ば、昨年出版されたアメリカ人アレックス・カーの書いた「犬と鬼」という本は、次のような書き出しで始まります。「広島から東京まで、延々800キロ続く退屈な風景にはうんざりした。味もそっけもない効率一点ばりのゴミゴミした眺めは見るのもつらく、トンネルに入るとほっとしたほどだ。」





新潟県聖籠中学校（設計 香山壽夫）
新しい教育方式に対応して計画された中学校。町の人々のコミュニティ・センターともなる。市民参加によって計画・設計された。

2) 建築から都市へ

そうした都市を何とかしたい、住んで楽しく、心休まる町をつくりたい、それが私の今の最大のテーマです。改めて言うまでもなく、都市をつくるという仕事は、決してひとりで行い得る仕事ではありません。多くの人、多くの専門の手によって、長い時間の内に初めて達成できる仕事です。専門分野について見てみても、政治学、経済学といった社会科学から、歴史・美術といった人文科学そして工学の様々な専門が関わっています。

その中で、私の基礎としている専門分野は建築学です。その建築学自体も幅広い分野ですが、その中で建築意匠学と呼ばれているものが私の専門です。日本で勉強した時は、工学部に属し、アメリカで教える時は美術学部に属することが示すように、工学と美術の両方に重なっている分野と言っていいでしょう。

建築意匠学の研究は、歴史学者のように古い建築について調べることもあれば、社会学者のように現代都市のフィールド・ワークをすることもありますが、医学者が診断・治療するように、実際の建築を設計することも大切な仕事です。私はそのようにして、教育学の研究者と一緒に、福島県三春の桜中学校や新潟県の聖籠中学校（上掲写真参照）を設計したり、演劇や音楽の専門家と協力して、彩の国さいたま芸術劇場や可児市文化創造センター等を設計してきました。

ひとつの建物を、たとえ小さいものであっても、全力を尽くし、ていねいに設計することは、建築家の務めであり、喜びであることは言うまでもありませんが、しかし、個々の建物がばらばらにつくられていては、本当に美しい町はできません。あるいはむしろ、ひとつの建物が本当に良いものであるためには、まず町全体にひとつの秩序がなければなりません。私が、建築家でありながら、都市デザインに挑戦することにしたのは、そうした理由からです。

3) 都市に住むとはどういうことか

そもそも都市の空間とは、私達にとって何なのでしょう。建築は、空間の芸術であるという定義は、美術・芸術学の教科書に必ず出てくる説明ですが、空間がその本質であるという点で、都市は建築の延長上にある、と言っていいでしょう。すでに15世紀、イタリア・ルネッサンスの建築家にして理論家であったアルベルティは「都市は大きな住居であり、住居は小さな都市である」と言っています。

建築や都市の空間とは、私達を囲み包んでいるものです。あるいは、建築や都市とは、私達の身体から発して四方に果てしなく広がっている、空間というこの捉えどころのない存在に、はっきりした輪郭を与えるもの、と言い直すこともできます。この輪郭によって私達は包まれ、守られます。建築

や都市は、厳しい気候や自然、そして時には外敵から私達を守ってくれるシェルター（保護物）であります。この保護という性質は、確かに建築や都市の大切な働きのひとつですが、決してこれが全てではありません。

建築と都市のもうひとつの大切な働きは、私達の共同体に秩序を与える枠組だ、という点です。フランスの人類学者、ルロワ・グーランは、住居は、人間にとって、言語と並んで世界を認識するための道具だった、と述べ、「住居は、3つの必要に対応している。技術によって有用な環境をつくること、社会体系のひとつの枠組を確立すること、そして周囲の宇宙に秩序を与えること、この3つである」と説明しています。この住居という語は、ここで都市と言いかえてもいいでしょう。すなわち、住居も都市も、いかに便利・安全で効率よくつくられていたとしても、社会の全体的秩序としての働きをなしていないものは、不完全なものだということになります。今日の都市に対する人々の不満の根源はここにあると言っていいでしょう。

4) 日本の都市を破壊してきた明治以降の「都市計画」

これまで書かれた「都市計画」に関する本を読みますと、そのほとんどが、欧米に比し、日本には都市計画がなかった、あるいはあったとしても不徹底で、それが日本の都市の混乱を招いた、と述べています。私はその説明は正しくないと考えています。都市は、連続的に形成されていくものですから、何時何処においても、それは不完全なものであるのが常です。また日本には「都市計画」がなかったわけではありません。江戸時代にも、それは明らかにありました。しかしそれは、明治以降、誤った方向をとってきました。その誤りとは、一言で言えば、都市の連続性を否定し、不徹底どころか、徹底的に革新しようとした点に基

本的な誤りがあったのです。

江戸時代につくられた日本の都市は、江戸をはじめとする大都市も、中小都市も農村も、それぞれ美しい秩序をもっていました。その様子については、幕末から明治初めに日本に来た外国人達が様々に書き残しています。たとえば、1859年に日本に来た初代イギリス公使オールコックは「江戸の町は、市内にも、お屋敷町の石塀沿いの道、郊外へ向う沢山の並木道、広い緑の斜面、お寺の庭、木々の豊かな公園があって眼を楽しませてくれる。...その美しさに匹敵するのはイングランドの田園位しかないだろう」と書いています。

明治以後の日本の都市の歴史を今日改めて見直してみますと、この良き日本の伝統を全くといっていい程評価せず、徹底的に作り直そうとして来たことに驚きます。その徹底ぶりは、小説家田山花袋が「東京の三十年」の中で明治の初めの東京の様子を「東京は市区改正でやかましかった。...昔の江戸は日に日に破壊されつつあった」と述べているように、すさまじいものだったと言っていいでしょう。改めて言うまでもなく、都市は、絶えず変化しているものです。そして明治が、他に類をみない程の激動の時代だったことは確かです。しかし極端な欧風化には、やがて反動あるいは反省の時が訪れ、たとえば、日本美術の復興が行われたりしましたが、都市については、今日に至るまで、何ら伝統の再評価なしに進んできたことは何とも不可思議なことです。これも、都市を便利・効率の手段とのみ考えてきたことが理由だと言っていいでしょう。

日本の近代的都市計画のはじまりとされているのが明治22年に制定された「市区改正条例」ですが、そのはじまりとなった芳川顕正の意見書が「道路八本ナリ家屋八末ナリ」と述べているように、その根本にある方針は、道路を広く、真っ直ぐにつくることでした。それは震災復興、戦災復興、そして

その後今日に至る都市再開発のすべてを貫いてきた基本姿勢と言っていいでしょう。あるいは、都市計画法が制定された大正8年、そのための主要な手法として制定された「区画整理」という方法も、道路を広く直線に作りかえるために、ひとつの地域を根こそぎにしてつくり直す方法で、それがこれまで日本中で行われてきたのです。

5) 持続的なまとまりを求める新しい動き

都市を根こそぎ作り直そうという主張は、実は日本の近代だけのものではありません。20世紀に始まるモダニズムの建築・都市の理念には、そうした考えがありました。そうした考えは、欧米では実現したのは一部だけですが、それでも、こうした都市の持続性を無視する考えは今強く批判されています。そうした批判の先頭をきったアメリカのジェーン・ジェイコブスは、すでに1964年に、アメリカの大都市で行われていた再開発を「人々を住んでいる場所から引き抜き、根無し草にする破壊的な行為」と断罪しました。

今日、世界のあちこちで、「都市は決して便利・安全のためだけではなく、共同体の秩序を確認するためのものである。そのためには、秩序を共有する町のまとまりをつくり上げなければならない」

という動きが急速にひろまりつつあります。たとえばヨーロッパでは、「都市の村（Urban Village）」をつくらうとする動き、アメリカでは「コンパクト・シティ（Compact City）」を目指す運動等があります。日本でも、数多くの市民運動、NPOが、町づくり、町並み保存再生を目指して組織されています。

100年かけて、徹底的にこわされてしまった、日本の町を再建することは決して容易なことではありません。しかし良きコミュニティが出来上がるのを待つのではなく、町づくりをすること自体の中で、コミュニティが育っていくと信じて、努力を続ければ、やがていつか、私達の町も住んで喜びのある美しい町に出来ると私は信じております。また、そうした幅広い様々な専門、立場の人々と力を合わせていくためには、放送大学という開かれた教育・研究の場は、他にない利点をもっていると思います。すでに私の大学院の研究室には、地方自治体で町づくりの中心の立場にあたり、あるいは住民運動で長く関わったり、あるいはまた建築設計、開発の専門の仕事にたずさわっている人達が、それぞれの立場を生かした研究をすすめています。こういう様々な人々と共に、私も力を尽くしていきたいと思っております（下掲写真参照）。



石川県野々市町役場、模型（設計 香山壽夫）
市庁舎、議会と共に、市民文化施設が一体になって、広場を囲んでいる。これも、市民参加の方法で計画が進められている。

生涯学習社会へむけて ——デジタル時代の遠隔教育

自然の理解 助教授 濱田 嘉昭
人間の探究 助教授 大橋 理枝

標題のタイトルでAAOU（アジア公開大学連合）の年次大会が2002年11月5日～7日にわたって、韓国の首都ソウルで開催された。以下はその報告記であり、読者とその見聞の結果を共有したいと考えている。

AAOUについては、これまでも「オン・エア」紙上で紹介されている（No.60、66など）、我々の放送大学のよう生涯学習を目的とし、遠隔・公開を特徴とする高等教育機関は世界各国にあり、アジアのほぼすべての国、地域に設置されている。AAOUは現在、東アジアから中東までの地域にわたる約30校を正会員とし、イギリスのオープン・ユニバーシティなどアジア以外でも世界的に先進的な遠隔教育活動を行っている20以上の大学が賛助会員として参加している。今年度は正会員である韓国国立公開大学（KNOU: Korea National Open University）がホスト校となっており、韓国で開催されたものである。

本学からも、丹保憲仁学長を団長とし教員4名、事務局から山田道夫教務部長を含め3名の合計7名が、遠隔教育の環境が果たす新たな役割を研究・調査することを目的として参加した。

ソウルおよびKNOU

韓国の首都であるソウルは緯度で比べると日本の新潟に対応する。人口は1,200万人であり、韓国の人口4,727万人（2000年現在）の1/4が集まっている活気のある国際都市である。どの道も常に交通渋滞しているが、ともかく流れてはおり、それだけ道路と車が使われていることの証拠であるというのは長岡教授の言である。日本人にとっての外国という違和感はない。少し離れた所から会話を聞くと日本語と区別できない。モンゴル語圏としての共通性のためであろう。箸と茶碗の食文化という点でも共通性があるが、鉄製の箸を使うことは肉料理と関係しているのだろうか。

食べ物と関係して、韓国内でもそして、海外にも有名になっているものに『NANTA』がある。『NANTA』ってなんだ？』簡単に説明すると、『NANTA』とは韓国初のノンバーバルパフォーマンス（会話のない劇）で、1997年の初公演以来、ロングランを続けている4人組のパフォーマンスのこと。『NANTA』というのは漢字の

“乱打”を韓国語で発音したもので、「なんでも叩いてしまえ！」というところから来ているそうである。ホテルの厨房を舞台にして繰り広げられるコミカルな劇である。一見に値すると思う。

韓国ではKNOUが遠隔教育の中枢を担っているが、その他に、主にインターネットを利用した15を上回る民間の遠隔教育システムが「Cyber Universities」として、KNOUとも密接な関係で共存しているようである。KNOUは我々の「放送大学」より10年ほど先行した経験をもっており、教育・学習素材も通信衛星を通じた放送だけでなく、デジタルネットワークの利点を駆使した教材の提供を行っている。例えば、インターネットを通じた配信、オンデマンドの学習教材の獲得などである。ビデオテープだけでなく、CDによる教材の提供も行っている。最先端技術の利用を標榜しているKNOUの意気込みが感じられた。登録学生数は2001年度で20万人強、これまでの卒業生が25.5万人とのことである。韓国が日本の37%の人口であることを考慮すると、わが放送大学の登録学生約10万人、卒業生2万人強に比べても、

韓国国内でのKNOUの影響力の大きさがうかがえる。逆に、わが放送大学が遠隔教育機関としてさらに発展する可能性も考えられる。

AAOU大会

ソウル市の南東地区（ジャムシル、蚕室）にあるロッテ・ワールド・ホテルを会場とした。大会を前にした4日には役員会議と総会が開催され、役員会議にはその一員であるわが放送大学から丹保学長が出席し、総会での議題などを審議した。また丹保学長は貢献賞選出委員会の委員長を務め、香港公開大学のTam Sheung Wai学長を選んだ。総会ではAAOUの活動報告や会費についての議論、新会員の審査などを行った。また次回の大会はタイ国において、スコタイ・タマチャート公開大学（STOU）の主催で行い、その次の年度には上海において、上海TV大学（SHTVU）の主催で行われることが決定した。イランのペイヤム・ヌーア大学（PNU）が2005年の開催国に立候補したいと名乗り出るなど、各国の積極的な姿勢が印象的である。

5日から、大会が始まった。金大中大統領からの祝賀の花が飾られた大会場で、開会のセレモニーが行われた。KNOU学長、日本の文部科学省にあたる政府機関の副大臣、UNESCOの高等教育を担当している専門官、ICDE（公開および遠隔教育の国際評議会）事務局長などの歓迎および祝辞の挨拶があった。ICDE事務局長は儀礼的な挨拶にとどまらず、教育機会の不均等が新たな経済格差を生む要因にもなっていることを指摘し、遠隔教育の重要性を強調した。続いてペンシルバニア大学のマイケルG.ムーア助教授による基調講演があった。

ムーア助教授の講演は「デジタル時代における遠隔教育と生涯教育」との題目であった。彼は専門とする経済との関係で、実際の調査、データに基づいた遠隔教育、デジタル情報の関係を詳細に述べた。実に情熱のこもった実践的



式典の最後には民族舞踊による歓迎があった。

な講演であったが、発表者の情熱が多少高まりすぎて、予定の時間を大幅に越えてしまった。運営に携わった人たちは相当に慌てたようである。

彼の講演の要点の1つは次のようなものである。現在の経済、社会、そして個人の発展は情報を知識に変換することを基本としている。その情報の量は2年で2倍になるほどの勢いで増加しており、学んだ知識はすぐに古臭いものになる。

インターネットへのアクセスの割合は、先進国と発展途上国の間、同一国内でも所得格差、教育格差、

地域格差などによる差が生じている。これは後者が原因でアクセスの差が結果であろうが、これが格差をさらに増長する原因となる可能性もある。このギャップを埋めるのは容易ではない。持てるものは新たな知識の獲得により多くの時間と投資を行っているからである。西欧先進国は、アジアの諸国の2倍、最貧国の200倍の研究・開発投資を行っている。

したがって、学習は生涯を通じて必要になる。この生涯学習の保証は、現在急激に発展しているWWW（World Wide Web）とインターネットが進化したdigital ageで可能になった。これからの知の獲得の中心は20代前半の年齢で知識を学ぶ従来型のon-campus大学からoff-campusの場に移るであろう。そして、遠隔教育を成功させる要点は、組織化、学習内容の設計、伝達法、運営の開発にある。ムーア助教授は以上の観点について、さまざまな事例を挙げて説明した。

11月5日から7日の3日間に、17ヶ国から出席した研究者および教育に携わっている専門家による発表と討議がなされた。全体で111の発表があり、各発表は10～20分程度であった。遠隔教育、生涯学習に関わる各国・地域のさまざまな現状、問題点が3つの会場に分かれて語られ、各国、各分野に特有の工夫や経験が披露された。発表者と出席者の交流も和やかなうちにも活発に質問と回答が伝達され、経験の交換ができた。この各分科会の前と3日目の最後には4本の全体会議（各1時間）があり、今大会のメインテーマに沿った内容の講演と討議が行われた。

本学からの発表

本学からは、長岡、濱田、大橋の3名が研究発表を行った。

長岡は「情報通信技術ICT^(注1)革命の時代における公開・遠隔学習ODL^(注2)大学が追求する方法の



放送大学からは（後列左から）長岡教授、濱田助教授、丹保学長、山田教務部長、矢崎修学指導課長補佐、（前列左から）中嶋大学院課企画調整係長、大橋助教授が出席した。

類似性と多様性、および各大学間での公開協調関係の可能性」と題した発表を行った。ICTの盛隆は認識されているものの、それを積極的に使おうとする機関がある一方で、ICTの導入に戸惑いを感じている大学・教員も多いことが指摘された。これはODL機関の目標と対象が異なることも反映している。しかし、学習に対する時間や空間の障害を克服する立場からも、より良い教材の開発のためにもICTの導入は必須であり、国や地域を越えた教材の共有と協調の確立がなされるべきであるという主張がなされた。

濱田は「デジタル学習教材の使い方」と題した発表を行った。放送大学におけるデジタル教材作成の経験をまとめ、実習型、自習型、データベース型に分類できると、それぞれの特徴を論文として記述した。一方、会場では、デジタル技術が知の構築に本当に役立つのかという、この会では暗黙のうちに前提としているデジタル教材の利点に敢えて疑問を呈する切り口で議論を提供した。なるほど、デジタル媒体と技術は膨大なデータを蓄積し、検索する能力はすばらしいもので、これを学習に利用しない手はない。しかし、私たちは、情報の集積だけを行うのを目的として学習しているわけではない。知識を越えて知恵を獲得する手助けをデジタル技術がいかにできるかを、公開・

遠隔学習機関で働いているものの共通の課題として考えたいという主張を行った。

大橋は「遠隔教育環境における語学教育」と題した発表を行った。語学教育の内容には4つの要素(読、聞、書、話)がある。このうち、会話のスキルを磨くためには、45分15回の講義で十分であるわけではなく、しかも、教育者と学習者が、即応して学習を進めなければ本当の効果が望めない科目を、一方通行の遠隔教育で行うことには、本質的な無理がある。考えてみると、外国語での会話というのは、母語が異なる者との会話である。この際、重要なのは言葉を操るスキルだけではない。異なる文化を背景とした者とのコミュニケーションであり、これが相互理解における最大の問題点である。異文化コミュニケーションを専門とする立場から、遠隔学

習・教育環境における語学教育のあり方と方法を進化させる必要性があると問題提起を行った。大橋は、この分科会の司会者でもあり、討議をまとめる立場と発表者の立場を念頭において進行を務めた。

大会からの印象

質問や討論で交流のあった人たちには、興味や関心を共通する一種の連帯感が醸し出されるのはどの国際・国内学会でも同じであり、会議の途中に設定されているコーヒープレイクや、昼食の機会を捉えてさらに交流を深めることになる。筆者も3日間の後には、数10枚の名刺の束を獲得した次第である。

放送大学は、独自のテレビとラジオの放送チャンネルをもち、早朝から深夜まで放送による講義を

行っている、世界的にも数少ない遠隔教育・学習機関である。その講義の質も相当に高い、先進的と自負しているのであるが、インターナショナルという意味ではむしろ後進的であるという印象を得た。KNOUから教材や制作の協調、交換などが提案され、正式なワーキンググループが発足する運びとなりそうである。少なくとも、アジアの多くの国々がグローバル化の波に乗り、教材の標準化、交換、人材の交流に積極的に動き出している。残念ながら、日本の対応は、過去の経済的優位性にあぐらをかいて、独善的になっており、世界の潮流を読みきれない、あるいは対応できないようなシステムになっているのではないかと危惧を抱いた。人も物も積極的に海外に雄飛すべきとの印象を強くした。

(注1) ICT(Information and Communication Technology) (注2) ODL(Open and Distance Learning)

研 究 室 だ よ り

「みえないものをみる」 不可視な心の実体とは

発達と教育 教授 西川 泰夫

私の専門学問分野は、「心理学」である。最近では、認知科学や認知行動科学とよぶ領域に身をおき、また本学ではそうした科目を担当していることは承知だろう。本題に入るが、このタイトルから、私の研究室で繰り広げられているのは、なにか超常現象や読心術の研究のようなものと誤解しないでほしい。また無責任にそれは面白そう、修行すると身体が浮いたりするの？自由に人の心を操れるのだ、ぜひ心の読み方を教えてほしい。などとはやし立てないでほしい。期待に反して申し訳ないが、私の研究は、それとは違う趣旨であるし、期待の物事を実践しているわけでもまったくない。

確かに、主題は「心」である。しかし、「心を科学する」ことに主眼がある。ところで、確かに心があるという各自の実感や確信はあっても、それ自体を見たことも触れたこともないに違いない。では、本当に「心はあるのだろうか」「あるなら、その実体は」？と問うことはきわめて科学的である。いな、人の文明史のはじめから現在でも哲学者によって問われ続けている伝統ある問いだ。これを引き継いだ科学は、心の科学的実証・検証と反証を繰り広げている。「心とは、記号(心的表象系)の処理・操作システムであり、処理とは『計算』である」というのが一つの帰結である。いまや

「機械の心」を論ずるのみならず「心は機械である」とさえいえる。また、機械を「コンピュータ」と読み替えてみるとよい。この立場は、心身一元論、物理的還元論でもある。私の研究は、時空を翔んでいる！



94歳の卒業生 が丹保学長と 対談

平成14年度第1学期末にこれまでで最高齢となる94歳で本学を卒業された小林金之助さん(東京都東大和市在住)と丹保憲仁学長との対談が、昨年12月19日、東京多摩学習センターにおいて行われました。

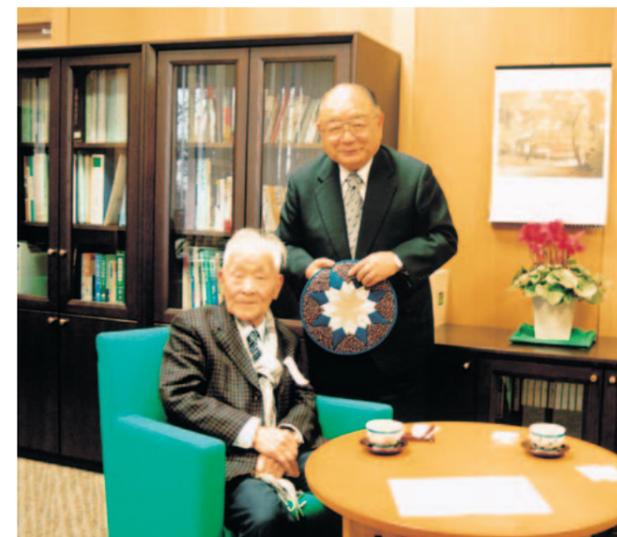
小林金之助さんは、明治41年1月1日生まれで現在95歳。開学当初の昭和60年4月、77歳にして一念発起し、まず大学入学資格を得るために当時の特修生として本学での学修をスタート。16単位を修得した後、昭和62年度第2学期に全科履修生として人間の探究専攻に入学。途中で生活と福祉に所属を変更、平成9年度第1学期末に全科履修生の在学年限満了のため一旦除籍になった後再入学し、平成14年度第1学期に卒業研究を含めて124単位を修得し、卒業が認定されました。

この間、大病を患ったことなどで、学業を断念することを考えた時期もあったそうですが、持ち前のがんばりと周囲の励ましで乗り越え、見事、学士(教養)の学位を取得されました。

丹保学長は、事前に小林さんの自分史である『貧

者の幸福』を読み、その生き方に感服し、2時間にわたる対談では、生い立ち、英語を勉強するきっかけともなった洋服仕立て業の苦勞と生き甲斐、シンガポールでの生活、帰国後のこと、放送大学との出会い等、話に花が咲きました。

また、小林さんが、勉強することの大切さや放送大学の「いつでも、どこでも、だれでも」学べる学習組織の本質について力説され、「今学期は、選科履修生として「カウンセリング概説('01)」を履修しているが、生きている限り放送大学で学び続けたい。」と意欲的に話されたことが印象的でした。



小林さんと小林さんの作品を手にした丹保学長

同窓会へのお誘い

放送大学同窓会連合会会長 須藤 國夫

放送大学の同窓会は平成2年3月に発足し、現在は18の学習センターにそれぞれ同窓会があり約6,200名が加入しています。同窓会は生涯学習の理想の実現をめざして、会員相互の親睦並びに母校及び同窓会の隆盛発展を図ることを目的としています。

主な活動は研修旅行、講演会、発表会、会報の発行、ボランティア活動、卒業祝賀謝恩パーティの主催等幅広い範囲にわたっております。会員には幅広い年齢、様々な職業、色々な趣

味・特技を持った人達があり、互いに対等の付き合いをしていることが特徴といえます。とても素敵な異歳異能集団ですので、卒業後は同窓会に加入して活動の輪にお入り下さい。

放送大学は生涯学習を謳っておりますが、その実践を卒業後ずっと続ける場が同窓会であるといえるでしょう。放送大学は全国化されましたが、同窓会はまだ全国化されておりません。同窓会を設立してみようという方は連合会にご相談下さい。ノウハウ等ご支援いたします。

平成15年度教養学部開設科目紹介

リハビリテーション('03)

リハビリテーション(リハ)とは「回復」を意味し、ジャンヌ・ダルクが火刑された後、宗教的に名誉回復されたのもリハと表現された。このようにリハとはもともと全人的回復を指し、今日、障害をもちながら社会復帰する人々を支援する学理と技術の総体であると理解されている。リハが医療の分野として成立したのは医療と看護よりずっと新しく、第3の医療とよばれた。ただ、従来は、対象と手段に限られ、整形外科のひとつの分野との誤解もあったが、近年、きわめて広範な問題について、多くの新しい方法が試みられ、高齢社会を迎えて、理念的にも技術的にも大きな質的变化を遂げている。リハの理念は、初期は職業復帰、ついで日常生活の自立、現在

はハンディをもつ人々も共に参加する「共生」を支援する学理・技術であると認められ、地域リハの分野が拡大されつつある。

本科目はリハの主な概念、目的、方法、分野について、それぞれの現状と問題点を展望する。本科目はラジオ科目であるので、手技な



眞野教授

北海道大学 教授 眞野 行生
生活と福祉 教授 近藤 喜代太郎

どの視覚的な部分を抑え、概念に重点をおく。本科目でとりあげる多くの分野のなかでも、神経系の可塑性、痴呆など高次脳機能、若干の内科的疾患などが本科目の特色となる。またバリアフリー社会の構築にむけて重視される地域リハにも十分に配慮した。



近藤教授

ユング心理学('03)

夢・神話・昔話・
イメージと心理療法

ユング心理学とは国際的には「分析心理学」と表現されますが、日本では創始者C.G.ユングの名前をとって「ユング心理学」と呼ばれることが一般的です。ユング心理学は基本的には「心理療法学」です。心理療法とは、様々の心理的問題・心身の症状・死や性をめぐる葛藤・対人関係困難・家系的しがらみ・社会的マイノリティであることによる生きにくさ・心身の慢性疾患や障害を抱えた人生の難しさ等々を伴って心理療法家を訪れるクライアントの抱える心理的苦痛を受けとめ、クライアントと共にその心理的困難を見据え続ける営みと表現してもよいでしょう。

不思議なことですが、クライアントの苦痛を受けとめ続ける過程の中で、クライアントの心の中、そして「クライアントと心理療法家」の両者の間には自律的な変容のプロセスが動き出します。この変容のプロセスに関しての学問こそ「心理療法学」と言ってよいかわかると思われます。

ますます不思議なことは、この「変容のプロセス」には、それがきわめて個人的なものであるにもかかわらず、私たちが世界中の神話や昔話の中で出会う妖怪や魑魅魍魎、普遍的なモチーフやイメージが満ち満ちていることです。この意味で、人間の心は、確実に「内的宇宙」と表現できるよ

発達と教育 教授 大場 登

うです。宮崎駿監督『千と千尋の神隠し』に現れる「異界との境界」としての「トンネル」「橋」「異界での食べ物」「本当の名前」「魔女のふたつの顔」「穢れ」「顔なし」「援助者による忠告」「龍」「川の神」その他その他は、人間の心の中に普遍的に存在しているイメージと言えるようです。



マスメディア論('03)

産業と技術 教授 柏倉 康夫
県立長崎シーボルト大学 教授 萩野 弘巳
東京国際大学 助教授 小室 広佐子

2003年、テレビは放送開始50年を迎えます。街頭テレビで力道山の活躍するプロレスが中継され、テレビの周囲は黒山の人だかりだったと記録に残されています。たった50年という年月の間にも、私たちのテレビの見方、ひいては社会の中のテレビの位置づけがずいぶんと変わったことが伺えます。

私たちの身の周りには新聞、雑誌、映画、ラジオ、テレビといったマスメディアは、それぞれがマス・コミュニケーションの手段として特徴をもち、社会に変革をもたらす、マスメディア自身も変化してきました。「マスメディア論」では、社会の中のマスメディアという視点から、マスメディアの特徴、社会にもたらした変革に焦点をあてて論じていきます。対象は上記のマスメディアに加え、

郵便、通信、電信、電話、書物、写真、デジタル情報などにも言及していきます。方法は、残された文字、映像資料などをよりどころとする実証主義をめざします。マスメディアと社会は、相互に影響を及ぼしながら変化していくととらえると、歴史的分析があつては

じめて将来の情報環境も予測可能となるでしょう。

この科目を担当する3人の講師は、いずれもマスメディアの現場で長年仕事をした経験を持ちます。理論に加えて実際はどうか、生きたマスメディア論を展開します。



左から、小室助教授、柏倉教授、萩野教授

芸術・文化・社会('03)

人間の探究 教授 徳丸 吉彦
人間の探究 助教授 青山 昌文

副題の「芸術概念の拡大をめざして」が示すように、芸術に対して次のような見方を強調しました。第一は、芸術を文化・社会から孤立させて分析するのではなく、それを文化・社会的脈絡の中に置くこと。具体的には、伝承、伝播、異文化との接触等の枠組みを使います。こうして、国を超える文学や音楽、音楽における文化変容(文化触変) 伝承のしかけ(楽譜や口頭伝承) 伝播のしかけ(映画祭やホールの役割) という切り口で多様な芸術を取り上げました。第二は、人間の諸感覚の大切さを見直し、感覚の間の関係も重視すること。このため、排泄行為と芸術行為の関係、視覚と聴覚の関係などを取り上げました。第三は、従来の芸術論で扱われなかった領域を取り上げること。このため、芸術としての服飾、芸術と

しての料理と飲み物を取り上げました。後者のためには、吉兆(日本料理)の湯木俊治氏、タイユヴァン・ロビュション(フランス料理)のジョエル・ロビュション氏他、榊田酒造社氏の三盃幸一氏他、それぞれの世界を代表する名人のみなさまにご協力をお願いしました。すばらしい講義と印刷教材の執筆をしてくださった客員のみな

さま、そして、お話を聞かせてくださった加藤周一氏(文学)、中島貞夫氏(映画)、青木賢児氏(宮崎県立芸術劇場)、中村透氏(佐敷町シュガーホール)に心よりお礼を申し上げます。放送教材と印刷教材の制作でお世話になったスタッフの方々にも感謝をさせていただきます。



徳丸教授



青山助教授

理想的な高・大連携

—— 広島県立祇園北高等学校との連携協力 ——

広島学習センター所長 小笠原 道雄

放送大学が進めている高等学校との連携協力事業として、全国4番目の事例が、平成14年10月から、広島県立祇園北高等学校（全日制・普通科、学生数1,192名、番本正和学校長、教員数63名）の生徒23名を迎えてスタートしました。

広島県立祇園北高等学校は、昭和58（1983）年、広島市郊外に創立され、本年創立20周年を迎える広島県の中でも元気溢れる、特色ある学校です。文武両道をめざし、県教育委員会の学力向上重点校に指定され、生徒の高等教育機関への進学に力をいれると同時に、生徒のクラブ活動が実に活発で、甲子園への野球でも県でベスト4に入る強豪校です。また、先生方も、県の高校・大学教員共同研究事業（教科指導研究）の指定を受け、教育・研究に多くの成果をあげておられます。

このような祇園北高等学校の校風からも、当然、生徒達の学習意欲も極めて旺盛で、知的好奇心も高いのですが、今回の連携協力で、さらに、「高校では習わない内容（例えば、心理学、環境、国際協力）を学習したい。併せて、早く大学の授業を体験したい。」という雰囲気が醸成されたようです。このような幅広い学習意欲を満たす大学として放送大学の科目を選択されたようですが、実は、それには背景がありました。放送大学大学院に、上位の免許を取得するため

に入学された祇園北高等学校の先生が、実際に授業を受けられ、その内容、方法から「放送大学の授業や方法は素晴らしい」「高校生にも十分活用できるものがある」と判断されたことです。このようにして、同じ学校の教師と生徒が放送大学の授業を共に学ぶという学習社会の有り様が、今回の連携協力によって実現することになりました。

今日、完全週五日制の実施で、全国の公立学校、とりわけ、高等学校の悩みは、土曜日をいかに活用するかです。父母、地域からの進学のための補習授業の要望は実に強いものがあります。そのような中で、直線的に、大学入試のための補習授業に走るのではなく、放送大学の科目を

生徒の興味、関心を軸に幅広く選択させ、学習する機会を提供することは、まさに、高・大連携の理念を実現する途であろうと思います。そのためには、当該高等学校の校長先生を中心とする教師側の理解と協力が不可欠なことです。放課後の時間、学校で生徒が放送大学の授業を受講する際、祇園北高校の先生が常に立ち会って下さり、単位認定にも責任をもって関わって下さる。実に有り難いことです。それを強力に支えて下さった広島県教育委員会事務局にも心からの感謝を述べたいと思います。広島学習センターといたしましては、祇園北高等学校の事例が広島県の多くの高等学校に広がるよう努めたいと考えております。



広島県立祇園北高等学校

退任のあいさつ

出逢いと体験の5年間

—— 感謝をこめて ——

愛知学習センター所長 田中 健治



平成10年4月に愛知学習センター所長を拝命したのは、放送大学の全国化がスタート、各地の学習センターで全科生を受け入れるようになった時でした。以来、5年間、教授会、所長会議、委員会などのために学園本部への出張と、面接授業講師のお願いと広報活動のために、県内各地の大学や自治体などの訪問に明け暮れているうち

に過ぎてしまったように思えます。しかし、こうした所長としての仕事を通して、それまでの研究室生活では到底体験できなかったであろう、いろんな分野、職種の人たちに出会うことができ、さらに、多くの人生経験豊かな学生の皆さんに接することができたことは、何よりも得難い貴重な出逢いでありました。これらは、自己の世界の拡大であり、同時に、自分自身を見直し、人生についての体験学習であったといえます。まさに「学ぶ」とは、体験であり、感動であり、そして、知識をもつほど

にそれらが深化するものであることを実感した次第です。恐らく、放送大学におけるメディアを通じた勉学は、体験による学習を一層豊かにするものであると思います。センター所長として、また教授としての5年間、自分に課せられた責務を十分に果たしてきたか否か心もとない気もしますが、大過なく勤められたことは、ひとえに、理事長、学長をはじめ学園本部の教職員、センターの事務職員らの暖かい支援があったからこそと本当に感謝しています。放送大学のますますの発展を祈っています。

学習センター当事者としての感慨

福岡学習センター所長 五斗 一郎



地域学習センターで2年、全国化後の学習センターで5年と7年間放送大学でお世話になりました。大学の全国化と大学院設置など地域の学習センターにとって激動の時期に、大過なく勤めることができましたのは、理事長、学長はじめ放送大学学園の方々のご高配によるものと厚く御礼申し上げます。

九州・沖縄ブロックについては、各学習センターが立地あるいは施設面で問題を抱えているなかで、それぞれ発展に努力されるとともに、学習センター相互の連携が緊密に行われていることを、拠点センターとして感謝しています。

福岡学習センターでは、私の在任中、学習センターの移転、面接授業の全国化、北九州サテライトスペースの設置、大学院開設などへの対応を行いました。とくに面接授業については、全国化に伴い可能な限り6専攻の体系化科目に対応する授業を

実施するように努めました。専任教員の方々には度々授業においていただき誠に有難く存じています。また、地元での講師依頼についても同様の方針で行い、現在まで約300人の現職及び退職教官に担当をお願いし、面接授業を実施しています。しかし、北九州サテライトスペースで授業科目を充足させるためには、施設の確保が急務となっています。

最後になりましたが、放送大学の益々の発展を祈念し退職のあいさつとします。

学習センターの整備

神戸大学の新合築校舎への移転

—— 自主的学習の成果を社会に生かそう ——

兵庫学習センター所長 梶見 和孝

兵庫学習センターは西宮市内の武庫川女子大学浜甲子園キャンパス内の施設をお借りして、平成5年度第2学期の270名から始まりました。現在2,111名の学生が在籍し、10年間に延べ13,248名が学習し、117名が卒業しております。平成15年2月、神戸市灘区の神戸大学社会科学系キャンパス内に、放送大学兵庫学習センターと神戸大学社会科学系との新合築棟に移転しました。このキャンパスは昭和初期に建築整備され、有形文化財として登録されている格調の高い重厚な意匠の学舎が4つもある、恵まれた研究・教育環境にあります。新校舎は地下1階、地上7階建てで外壁はスクラッチタイル張りで従来の落ち着いた環境と調和するようにデザインされており、アプローチしやすくバリアフリーで、神戸市バス36系統の「神戸大学正門前」停留所で降りてすぐです。

兵庫学習センターとしては、6階の視聴・図書室、コンピュータ実習室、コミュニケーションの場としてのホワイエ、事務室、客員教員・講師控室と7階の大講義室(1)と(2)、小講義室、多目的室、会議室、ラウンジなどで面積はこれまでの5倍の1,556㎡になり、AV機器も充実しております。4、5階は神戸大学大学院社会科学系研究科の

社会人向け高度専門職業人教育・研究施設です。神戸大学生協が運営する食堂(1階)および売店(2階)と駐輪場(地下1階)も併設されています。新学舎(海拔約150m)の北側に国立公園の六甲山系を控え豊かな自然と接し、南側には神戸のポートアイランド、建設中の神戸新空港、神戸港、六甲アイランド、芦屋、西宮、大阪、堺、岸和田、泉佐野、関西空港など、大阪湾が一望できる雄大な都市景観で、晴れた日には淡路、友ヶ島や紀淡海峡も眺望できます。さらに、無数の点々が光り輝く夜景も大規模で迫力ある見事な景観です。

平成14年6月に開設した姫路サテライトスペースと合わせて、教職員一同が活力のある企画運営に努めており、自主的な生涯学習と色々な世代の人々との交流を深め、学習成果を社会に活かせる拠点としての発展を祈念しています。



平成15年度第1学期教務スケジュール

		学部 (教養学部)					
月		4月	5月	6月	7月	8月	9月
第1学期	授業	1(火) 28(月)	6(火)	放送授業期間		21(月) 22(火)	30(火)
	手続き等	12(土)	下旬~上旬 通信指導の送付	9(月) 必着 通信指導提出	29(日)	中旬 単位認定試験通知(受験票)の送付	5(火) 21(木) 面接授業(集中型)
第2学期	授業						
	手続き等		30(金) 消印 面接授業(集中型)の科目登録申請	5(木) 必着 面接授業(集中型)の授業料納入	18(水) 25(水)	24(木) 30(水) 単位認定試験	上旬 科目登録申請要項の送付
				15(日) 消印	平成15年度第2学期出願 (平成15年度第1学期で学籍切れの学生)		3(日) 必着
						中旬 合格通知書の送付	12(金)
						上旬 授業料納入	下旬 印刷教材の送付

		大学院 (文化科学研究科)					
月		4月	5月	6月	7月	8月	9月
第1学期	授業	1(火) 28(月)	6(火)	放送授業期間		21(月) 22(火)	30(火)
	手続き等		下旬~上旬 通信指導の送付	9(月) 必着 通信指導提出		中旬 単位認定試験通知(受験票)の送付	1(金) 2(土) 単位認定試験
第2学期	修士全						
	修士科						
第2学期	修士全						
	修士科						
				15(日) 消印	平成15年度第2学期出願		3(日) 必着
						中旬 合格通知書の送付	12(金)
						上旬 授業料納入	下旬 印刷教材の送付

平成16年度修士全科学生募集要項は6月15日(日)から配布を予定しています。修士全科学生入学者選考についての日程等詳細は平成16年度修士全科学生募集要項を入手し確認してください。

教務のお知らせ

平成15年度放送大学大学院文化科学研究科(修士全科生)入学者選考結果

高度専門職業人の養成等を目的とする放送大学大学院(第二期生)に529人が合格、12月13日に本人宛通知しました。

なお、最終倍率は4.42倍となりました。

プログラム等	総合文化		政策経営	教育開発	臨床心理	計
	文化情報科学群	環境システム科学群				
募集人員	140人程度	130人程度	130人程度	60人程度	40人程度	500人
出願者数(倍率)	263人(1.81)	227人(1.67)	302人(2.17)	278人(4.15)	1,269人(30.21)	2,339人(4.42)
合格者数	145人	136人	139人	67人	42人	529人

「認定心理士」資格認定に係る特例措置が廃止になります

(社)日本心理学会認定心理士資格の認定に際し、本学の学生については、基礎科目(C)領域で単位減免の特例措置が適用されていましたが、この特例措置は平成16年3月までで廃止となりますので、科目履修や資格認定の申請にあたっては十分注意してください。

平成16年3月までの同学会への申請分 ⇒ これまでどおりの特例が適用されます。

平成16年4月以降の同学会への申請分 ⇒ 認定基準どおりの単位修得が必要です。

* 詳細は、各学習センターの掲示または本部修学指導課卒業判定係(043-276-5111(内線4276))まで

伊藤教授 日本学士院会員に

伊藤貞夫教授が、昨年12月12日開催の日本学士院総会において、同年のノーベル物理学賞を受賞した小柴昌俊・東京大学名誉教授、前年の同化学賞を受賞した野依良治・名古屋大学大学院教授ら7人とともに、新会員に選定されました。日本学士院は、各分野を代表する科学者で構成する我が国唯一の顕彰機関で、定員は150人です。

伊藤教授は、西洋史学、特に古代ギリシア史の分野で国際的にも評価されており、本学では、平成15年度開講放送授業科目のうち、教養学部の「古典古代の歴史('00)」(専門科目・人間の探究専攻)「都市と人間('03)」(共通科目・主題科目)の2科目と大学院の「地域文化研究('02)-地中海世界の歴史像-」(総合文化プログラム(文化情報科学群))を担当しています。

郵便局から学費が振り込めます

これまで、学費の納付方法は、郵便局を除く金融機関から本学所定の口座への銀行振込のみでしたが、学生の皆様方からのご要望も踏まえ、平成15年度第1学期の学費の納付より、郵便局からの振込も可能となりました。

なお、郵便局を利用される場合は振込手数料がかかります。

鹿児島学習センターが移転します

鹿児島学習センターは、平成15年4月1日から、

〒892-0816

鹿児島市山下町14-50

かごしま県民交流センター内に移転します。

なお、電話番号(099-239-3811)は変わりません。

編集後記

2003年早々、卒業研究の試問を行う機会があった。1年前に放送大学に着任した私にとっては初めての経験である。当日は神奈川学習センターを会場に、「産業と技術」に所属する学生たちが提出した卒業研究について、1人15分の割り方で発表と質疑を行ったが、前任校とは一味ちがった充実した時間を味わうことができた。

最大の理由は、一人一人の研究テーマが多様であり、しかもその多くが実社会での経験に立脚したものであることによる。35年にわたる飛行機のジェットエンジン整備のキャリアをもとにした論文、江戸時代における朝鮮人参の殖産から薬効までを追求したもの、あるいは水道の濾過装置をめぐる綿密な考察など、長年にわたる仕事の成果を論文に結晶させたものが目立った。こうした地に足が着いた研究が、放送大学で学ぶ人たちのひとつの特徴であり、強みであることを実感した。これから勉学を始められる方々の成果に大いに期待したい。(柏倉康夫)

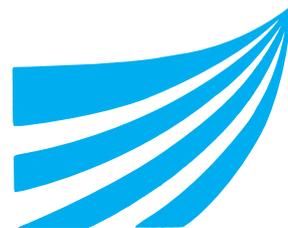
大学通信編集委員会

(平成14年度)

委員長 教授 阿部 齊
副委員長 同 柏倉康夫
委員 同 徳丸吉彦
〃 助教授 臼井永男
〃 同 坂井素思
〃 同 杉森哲也
〃 同 大橋理枝

(編集事務担当)

教務部修学指導課



放送大学学園

http://www.u-air.ac.jp/hp
ISSN 1343-3369

R100